神様はいない

ハセガワアユム

登場人物

澤田キリコ（２８）　・・・Ｂ級小説家。事故に遭ってから足が悪いが屈折せず自分の小説を信じる。

君津由和（２８）　・・・　佐久間文庫の編集者。キリコとは幼なじみで、隠れて交際している。

澤田信一（３６）　・・・　オーナーである父親が死別したため、店を継ぐ。生真面目な江戸っ子。

澤田信二（３１）・・・　元戦場ボランティア。外国からアミンを連れて来た。ほぼチンピラ。

アミン（２１）　・・・　外国人留学生。ニッポン人とのハーフ。

真下裕樹（２４）　・・・　澤田屋のバイト。大学院生。後に@@@@@@@となる。

古河勝（３２）　・・・　商店街の会長。「自由の会」広報部。

日下部幸治（３０代）　・・・　「自由の会」支部長。

『神様はいない』

愛　★　戦争　★　平和　★

＜STORY＞

老舗の蕎麦屋・澤田屋に二階では、「受賞歴無し」「重刷無し」「トラウマ無し」の小説家・澤田キリコが打ち合わせを無視した作品を上梓しようとしていた。同じく一階では、長男である信一が新興宗教「自由の会」の勧誘を受けていた。その宗教は神様すら信じていなくていいという、あまりにもカジュアルな宗教だった。

身構えてしまうような、テロ、宗教、救い、自己表現、トラウマの飽和、愛の行方たちを、あくまで"東京の視点"でカジュアルに描き、身近まで手繰り寄せた意欲作。2009年9月、新宿シアターモリエールにて上演。劇評サイト、webワンダーランドに劇評掲載。

〈シーン1〉

舞台は蕎麦屋なのだが、舞台上手に売れない小説家・澤田キリコの仕事部屋があり、無造作に汚く散乱している。
そのなかで黙々とノートPCを打ち続けている、キリコ。

一心不乱に打ち続けていると、編集者の君津が入って来る。
黙々と打っている、キリコ。

君津　どう？

それを後ろから見守る君津。
PCを後ろから覗いていると、ふっと、後ろから覆いかぶさる。

キリコ　ちょっと、

君津　ああ、

キリコ　（戻り）
君津　・・・

また覆いかぶさる。

キリコ　ちょっとお、（PCを指差し）マジで！
君津　ああ、
キリコ　マジで！いまマジじゃないですか！これ、マジでしょ？
君津　ああ、マジ、マジ。
キリコ　マジですから。
君津　マジだから、止めない？
キリコ　・・・
君津　書き直しなんていいから。・・前のでいいよ。
キリコ　前のって？
君津　だから（封筒から原稿を出して）こっちの。
キリコ　（読み）こんなの、
君津　こんなのって、俺ら苦労したじゃん。

キリコ　ああ、苦労したよ、違う意味で苦労しました。こんな毒に薬にもならないような、ほっこり（怒り）ほっこり？

君津　ほっこり、

キリコ　ほっこりってなんだよ、そんな日本語ないでしょうが！

原稿を投げ捨てる。慌てて拾う、君津。
それに追い打ちをかけて破きにかかるキリコ。

君津　ああああっ！はあっ！

キリコ　忘れてよ！これは！もうこんなほっこりなんて存在意義が無い！（破く）

君津　ああああーーーーー！！！はあッ！

キリコ　忘れろ！

君津　（パニック）データーあるもんねえ！これ破ったって、会社もどればデーターあるもんねえ！

キリコ　君津さんパニクんないでよ！（抑え）

君津　（抱きつき）好きなんだよお、好きなんだって、

キリコ　それは判ったから、

君津　いんやわかってない、小説ってジャンルは仕事なんだぞ、

キリコ　・・・

君津　好きなことが書けます、じゃなくていろんなことが書けます、なんだよ。

キリコ　何干よってんのよ、

君津　ひよる？

キリコ　誓いを忘れたの？

君津　・・・

キリコ　あたしたちで革命を起こすって誓いだよ、

君津　・・起こす起こすって、もう四年だぞ。今回で何冊目だよ？

君津、立ち上がる。

君津　頼むよ。ここはひとつ諦めてよ。仕事じゃん。

キリコ　・・・

君津　こういうの一個出しておかないと、確実にちょっと売れておかないと、

キリコ　こんなの売れんのか、

君津　（遮り）これ以上、きみのこと庇えないから。

間。

キリコ、PCに戻る。
君津、部屋を出て行く。
PCを打つ手が止まってしまう。
画面を見つめるキリコ。

机の下から酒を取り出し、ラッパ飲みする。
そして、PCを端にどけると、
引き出しから大事そうに桐の箱に入ったお守りを出し、拝む。

そして、ゆっくりと仕舞うと、また書き出す。

明かり転換。

＜シーン２＞

舞台中央の蕎麦屋に移る。キリコは薄暗いなかで、そのまま書き続けている。
蕎麦屋には外国人（ハーフ）のアミン、蕎麦屋の次男である信二、
アルバイトの真下（大学生）がいる。休憩らしく、テーブルの上にお茶などがある。
信二は新聞を広げて読んでいる。

アミン　ドーテイ？
真下　ああ・・
アミン　どーてい？
真下　そう、
アミン　・・・（信二に）キリコさん、女性ですよね、
信二　あたりめえだろ、
真下　あ、だからドーテイじゃヘンか。ヘンだよな。
アミン　はい。
真下　あ、ヴァージン。ヴァージンだ！
信二　ヴァージン？　は？　ヴァージン？
アミン　・・（照れる）
真下　（笑い）何照れてんだよ、馬鹿。

アミン　馬鹿？

信二　馬鹿はお前らだよ！はあ？目の前で人の妹、ヴァージンだなんだって

真下　や、違いますよ～

信二　いまは男っケねえけど、足悪くする前はよお、よくデートだなんだって出歩いてたんだぞ、

真下　そーなんですか、

信二　あ、妹のセックスは想像しちゃった。おえ、なんか遺伝子レベルでキーンンって来るな。なんだこれ（頭を振り）

真下　（信二に）聞いてなかったんですか、ショハンドーテイって話をしてたんですよ。

アミン　あ、そう。それ。それです、

信二　（考え、手錠を想像）初犯で童貞なんて最悪じゃねえか。

真下　本の話ですって。初版。

信二　おお、

真下　・・本って売り切れたらまた刷るでしょ、二刷り三刷りって。

信二　ああ、あたりめえだろ、

真下　それがいつまでも売り切れないで、初版のままで残るから、初版童貞って、あだ名がね、

アミン　女性、

真下　じゃあ初版ヴァージンだよね、ってあだ名が、キリコさんに

キリコの居る二階を指差す。

信二　うわ、可哀相だな。

アミン　いじめです、

真下　資本主義だから、

そこに君津が降りて来る。

君津　ああ、どもお疲れ様です。

ニヤニヤと君津を囲む店員たち。

信二　どーでした？あの、うちの初版ヴァージンは、

君津　・・・（固まる）

信二　あ、初版童貞？

店員、一同笑いからかう。

君津　ああ、あ、ああ、あ～、ヤダな。そんな呼び方（笑）止めてくださいよ。

真下　自分が付けたんじゃないですか。

君津　ぼくじゃないですよ。

真下　じゃあ誰？

君津　業界？

真下　そんな言葉聞いたことないっすよ。

君津　聞いたこと無い言葉どうやって聞いたの？

真下　だから君津さんが、

君津　はあ？

真下　おい、アミンもなんか言えよ、

信二　関係ないでしょ、

真下　アミンが聞いたってんすよ、

アミン　確かに、俺、聞きました。

君津　日本語判んないでしょ、

信二　こいつ滅茶滅茶わかりますよ、

君津　へえ、（蔑み呟く）知ってる。

信二　あいつの小説がB級なのは判ってますから、別に気にしないでください。

君津、入り口で立ち止まり、軽く泣き出す。

信二　（引きつつ）あ、すいません。・・・担当さん目の前にしちゃって、B級なんて、ねえ。お前らも謝れ。

二人　・・・

信二　謝れ！

二人　すみません・・

君津　（ハンカチで目頭を軽く押さえ）急に書き換えるって。そりゃないっすよ。・・・全部書き換えるって。

全員　・・・

君津　頭おかしいんですよ、あいつ！・・・自分信じ過ぎなんですよ！！！

信二が震えている。

君津　・・あ、ごめんなさい。

信二　キリコォ！

叫びながら、二階へ行く信二。それぞれ追う。
階段を上がる騒がしい声が聞こえる。

キリコの部屋にゴルフクラブを持ったまま、信二が飛び込んでくる。

キリコ　なに？！

信二　お前、君津さんが苦労して担当してくれてるってのに、全部書き直すなんて引っ掻き回してるらしいじゃねえか。

キリコ　信二に関係ないでしょ、

信二　関係あるよ、いい年してこんな余生みたいな時間の使い方しやがって、ああ？！

追って入って来る一同。

真下　いいから、ちょっとこれ、はなして！（ゴルフクラブを掴む）

信二　なにすんだよ、

真下　危ないって！

手ぶらになるが負けない信二。

信二　売れない小説なんて書いてプラプラ出来るほどなあ、うちは裕福じゃねえんだよ！いい年なんだから、いいかげん自立しろ！

キリコ　元チンピラに言われたくないっての！

信二　チンピラだあ？

再びゴルフクラブを掴む信二。

全員、止めに入り、もつれ合い倒れ込む。

キリコ　ほらあ！

全員　（押さえたまま）

キリコ　（君津を指し）君津さん、『一杯のかけそば』のリメイク書けって言うんだよ。

全員　・・・

キリコ　信じられる？『一杯のかけそば』のリメイクだよ？

明かり転換。

転換中に、破り捨てられたキリコの原稿を全員で拾い始めて、読み始める。

＜シーン３＞

蕎麦屋に明かりが転換する。

勢いよく蕎麦屋の扉が開く。

信一が威風堂々と歩いてくるが、それは逃げて来るようにも見える。

扉を閉めようとすると、古河と日下部が追って来て阻止する。

古河　おいおい信ちゃんよお、ちょっと待てって、話だけでも、なあ

日下部　そうです、話だけでも、

信一、扉を閉めて追い出す。
扉を叩きながら抗議する二人。

信一　もう今日は終わりだよ！
古河　しんちゃん！しんちゃんってばよお！俺ら古い付き合いじゃねえかよ！
日下部　澤田さん、
古河　こんな仕打ちないんじゃねえのか！
日下部　澤田さん、
古河　親父が天国で泣いてっぞ！
日下部　澤田さん、
信一　うるせえ！！うるせえよ！

一喝され静まる二人。信一、どっかりと座り吐き捨てる。

信一　・・親父は、泣いてなんか、ない。

タバコを手にして、庭まで行き、タバコに火をつけようとする。

すると再び、日下部達がどんどんたたき出す。

古河　泣いてるよ！

日下部　澤田さん、

信一　うるせえよ、まだいたのか！？

古河　泣いてるって！絶対！

日下部　澤田さん、

古河　あ、雨だ、雨振って来た！

雨の音がする。

日下部　（なにか耳打ち）

古河　え、え、ほんとですか？（信一に）おい、これ親父さんの涙だ！

信一　んなわけねえだろ！

日下部　（泣き出す）

古河　え、なんで！？なんで日下部さんが泣く訳？泣けないあいつの為になんで？日下部さんが？

信一　あのなあ、

日下部　澤田さん、あなたはお父さんの気持ちを受け継ぎたい一心なんでしょ、

信一　・・・そんな立派なもんじゃねえよ、

日下部　立派です。立派だからこそ、いまこうしてあなたのお父さんは泣いている。

信一　・・はあ。

古河　なあ、しんちゃん、５分。あと５分だけでいいから、日下部さんにくれないか？なあ

間。

古河　雨宿りさせてくれよお。（くしゃみ）

しょうがないので戸を開ける。
図々しく入ってくる古河たち。

信一　ずぶぬれじゃねえか。

古河　親父さん、号泣だな。

信一　（無視して日下部に）何で泣くの？

日下部　すみません、ちょっと感動して、

席に座り雨を拭う。

信一　５分だけだぞ、５分したら、帰ってもらうから。

古河　わりいわりい、

日下部　ありがとうございます。

信一が奥からタオルを持って来て、渡す。

古河には遠慮なく叩き付ける。

信一　親父の名前なんて出すからよお、縁起でもねえし。

古河　わりいわりい、（テーブルにあるお茶を飲んじゃって）あ、わりい、人の飲んじゃった。（軽く見渡し）誰の～？

だが客は1人も居ない。

古河　はは、ちょっとお茶入れてくら。

信一　え？

古河　いいって、いいって、店のあれは分かってるから。昔とった杵柄で、

信一　（やや冷たく）ああ、もう店、昔とは随分違うんで。

古河　・・そう。

古河が奥へ行こうとすることを阻む、信一。

日下部　単刀直入に言います。・・澤田さん、このお店潰したくないですよね。

信一　（首を傾げ）はあ？

日下部　でも経営はよろしくないんでしょ？

信一　・・・

日下部　（大きく頷いて）ですから、うちに入信して戴ければ、

信一　だから、そこでなんで、シューキョーになるの？

日下部　はあ、さっきもお話ししましたが、身近な存在として、

古河　（遮り）そうそうしんちゃんはよお、神様とかシューキョーをでっかくとらえがちなんだよ。

日下部　そうです、

古河　もっとカジュアルに考えなきゃよ、互助会みたいなもんよ。

信一　支部長さんだかなんだか目の前に、そんなこと言っていいの？

二人　全然。

日下部　全然です。

パンフレットを古河が出し、整理し始める。
その横でショーアップ気味に話し出す日下部。

日下部　古河さんからお話は聞いております。「一杯のかけそば」のモデルになった蕎麦屋ということで脚光を浴びるが、その栄光も続かず低迷。

信一　おい、

古河　（日下部に小さく）低迷とは言ってないでしょ、

日下部　・・迷走。

信一　おいって、

古河　合ってんだろ、迷走で。

日下部　蕎麦だけではなくメニューを広げ（指を折って数え）うどんはもちろんのこと、ラーメン、塩ラーメン、みそラーメン、とんこつラーメン・・（思い出せず詰まる）

古河　ちゃんぽん、

日下部　（頷き）ちゃんぽん、チャーハン、麻婆なす、

古河　（呟く）もう街の中華屋だよなあ

信一　リニューアルしたんですよ。だから！・・親父の保険金で、全部。それから、また蕎麦一本でやってますから。

日下部　でも低迷。あ、ごめんなさい、低迷って言っちゃいました。はは。

古河　ははは、

テーブルにあった、誰かの飲み刺しの水をかける信一。

日下部　わっぷ

古河　日下部さん！（信一に）しんちゃんよお、こんな無下、罰当たんぞ！

日下部　大丈夫、大丈夫ですから。

息を整える日下部。その仕草も、薄らうざい。

日下部　これもお父さんの涙なんです。

明かりが変わる。

再び、キリコの部屋にぼんやりと明かりが着く。
泣いている連中のすすり泣く声が聞こえる。
キリコは彼らの泣く姿をソファから見つめている。
か細い泣き声のなか、彼女は何かの記録のように話し出す。

ボイスレコーダーを手に取り、それはモノローグとなる。

キリコ　こいつらは馬鹿だ。ただのロボットだ。・・ひとはスイッチを押せば泣くように出来ている。だが、それを否定する馬鹿が多いのは、自分の涙だけは特別だと思っているから、認めたくないだけだ。書く側の人間はどうすれば読者が泣くのかというスイッチを知っている。スイッチを調べ上げ、解体し、再構築し、その涙には理由が常にあり、訳が分かるから彼らは泣くのだ。彼らの脳にはきっと、ある手順を踏むと簡単に押せるスイッチがあるのだ。それを用意し、提供し、押すまでの手順を分かり易く書いた説明書みたいなものを小説と呼ぶなら、君津よ！

君津、天啓を受けたかのように一瞬大きく泣く。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

神様はいない（おためしサンプル）

2014年5月8日　初版発行
2014年5月10日　改訂（ver.3.000）

著　者　　ハセガワアユム　　© 2014年
発行者　　石村寛之
発行所　　有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話　0422-49-2903